

第3分科会②

協議題 身近な知性と豊かな創造性を育む教育活動を実現するカリキュラム・マネジメントの推進

研究テーマ 資質・能力の育成を目指す教科等横断的なカリキュラムと授業の改善

提案者 熊本県八代市立有佐小学校 校長 岩見 浩史

1 はじめに

八代市は、熊本県の中央南寄りに位置し、市の西部は日本三急流の一つである球磨川などの堆積物や江戸時代からの干拓事業によって形成された八代平野が広がっている。東部は九州山地の脊梁地帯で、宮崎県に接し、面積は681.4㎢と県下第2位を誇る。人口は約12万人で、豊富で良質な水の恩恵を受け、全国有数の農業生産地、県内有数の工業都市として発展してきた。

有佐小学校は、在籍児童103人、9学級(内特別支援学級3)である。素直で明るく、性別や学年に関係なく仲良く活動できる児童が多い。すぐ近くに貝塚があり、大昔は海辺であったことを感じさせるが、現在は干拓が進み、周囲には田畑が広がっている。地域の主な産業は農業で、米・い草を主要産物としているが、近年は、トマト・イチゴ等のハウス栽培も増えてきている。また、住民の就業は、農業中心から第2次、第3次産業へと移行しつつある。保護者や地域は学校教育に大変協力的で、各種学校行事、交通指導、PTA活動へも積極的に参加される方が多い。

2 主題設定の理由

中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」では、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となる必要がある」と述べられている。これからの時代に求められる資質・能力を育成するためには、校長は、ビジョンを明確にし、教頭と連携して教務主任や研究主任等に積極的に働きかけ、教育の内容を教科等横断的な視点で組み立て、学校内外の教育資源を最大限に活用しながら教育活動を展開させ、教育実践の分析と客観的なデータに基づいて教育課程の実施状況を評価、改善して学校の教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントを推進していかなければならない。

また、カリキュラムの改善とともに、授業が改善されなければ資質・能力を全ての児童に育成す

ることはできない。新型コロナウイルス感染症の影響により、GIGAスクール構想による1人1台端末と高速大容量のネットワーク環境が前倒して整備され、教育環境は急激に変化した。この新たな環境を効果的に活用して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが学校に求められている。そのためには、研究授業を中心とした実践的な校内研修の充実が大切である。

3 研究の視点

- (1) 資質・能力の育成を目指す教科等横断的な視点でのカリキュラム改善
- (2) 授業改善のための校内研修の充実

4 研究の実際

- (1) 資質・能力の育成を目指す教科等横断的な視点でのカリキュラム改善

①資質・能力の関連をまとめた単元計画の作成

本校は令和2・3年度八代市教育委員会のICT教育推進モデル校の研究指定を受けていた。その2年目に校長として赴任した。新型コロナウイルス感染症の影響でGIGAスクール構想の機器整備が前倒して進められ、前年度の3学期に1人1台端末と高速ネットワークの環境が整ったところだった。

まず、前年度までの研究テーマと成果や課題について、研究主任から説明を受けた。校長の思いとして「ICTを使うことが目的化しないように気をつけ、資質・能力の育成のために効果的にICTを活用するということを大切にしてほしい」と伝えた。11月に研究発表会を開催する予定も決まっており、時間的な制約もあるので、前年度の研究テーマや研究の方向性は、大きく変更しないようにし、「自ら学びに向かい、学びを活かし、つなげる子どもの育成～言語能力と情報活用能力を育む授業づくりから探る～」とした。ただし、それまでの総合的な学習の時間の年間計画は、関連する教科等の単元名を記すだけで、それぞれで育成する資質・能力がどのように関連するのか分かりにくいものだったので、育成を目指す資質・能力を明確にした総

総合的な学習の時間や生活科の単元計画（資料1）を作成させた。資質・能力（付けたい力）ベースで教科等の関連をまとめた単元計画を作成することにより、教育活動相互の関係を捉え、どのような資質・能力を育むかを明確にしながら教育実践を進めることができた。

第6学年1学期 単元名「有佐の歴史や人の生き方を伝えるには」	
ねらい 有佐小学校区の「歴史・人物・こと・もの」を調べ、そこにこめられた思いや願いを知り、どのように伝えるか考える。	
教科・領域名： 総合的な学習の時間 題材・単元名（探ろう！ふるさとの歴史） ねらい：有佐小学校区の歴史（史跡や学校、人物など）を調べる活動を通して、学校やふるさとのこめられた思いや願いに気付く。 付けたい力 （理解設定の能力） 自分の知っていることや疑問を出し合い、その中から課題を決めることができる。 （課題解決能力） 地域の人への取材、文庫、インターネット等を用いて調べ、学習を進めることができる。 期待する児童の意識 ・いつも見ているところでもこんな意味があったのか。 ・今まで知らなかった場所、疑問も実際に見たり聞いたりするとよく分かる。 ★ICT活用 パワーポイントによる発表	教科・領域名： 社会科 題材・単元名（日本の歴史～オリエント～） ねらい：有佐小学校区の「歴史的なもの、人物、こと」を調べる際に、情報を適切に調べまとめる技術を身に付ける。 付けたい力 （知識・技能） 書籍や文化財、地図や年表などの資料で調べ、まとめている。 期待する児童の意識 ・調べ方が分かった。時代の流れは大切だからメモしておこう。 ・昔からある建物は、インターネット、風町の資料から調べよう。 ★ICT活用 インターネットによる検索
教科・領域名： 国語科 題材・単元名（聞いて考えを深めよう） ねらい：自分の調べたことを取材する際に、話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと自分の考えを比較しながら、自分の考えをまとめることができる。 付けたい力 （知識・技能） 話し言葉と書き言葉の違いに気付いている。 期待する児童の意識 ・発表するときと資料に書くときの言葉の違いに気をつけよう。どんな文・末にするよいかも分かった。 ・分かりやすい伝わる言葉の表現方法もこれから使っていこう。	教科・領域名： 国語科 題材・単元名（聞いて考えを深めよう） ねらい：自分の調べたことを取材する際に、話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと自分の考えを比較しながら、自分の考えをまとめることができる。 付けたい力 （思考・判断・表現） 「話すこと・聞くこと」において、話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめている。 期待する児童の意識 ・資料だけでは分からないことは、地域の人に聞くことよ。そのときは、どんなことが知りたいのか、もっと聞きたいことは何かを伝えよう。 ・同じ内容を調べていても、文章の情報と違うことがあるな。

（資料1）各教科等の資質・能力を位置づけた単元計画

②カリキュラムの評価と改善に向けての取組

12月はカリキュラム・マネジメントにとって大切な月である。12月初旬に学力調査が実施されるとともに、研究論文をまとめる時期でもある。年度途中だが、カリキュラムを評価し、次年度に向けて動き出す時期だと考えている。

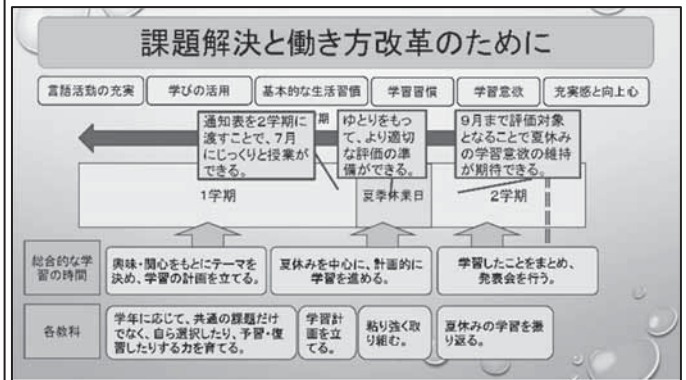
令和3年度の学力調査や学校評価の結果分析では、育成を目指していた「言語能力」と「情報活用能力」については向上が見られたものの、「学習意欲」「学習習慣」「生活習慣」が課題であることが分かった。

教務主任には、学校の大きな課題の1つである「働き方改革」の視点でも次年度の教育課程を構想するように指示した。1月、教務主任から次年度は評価二期制を取り入れたいとの相談があった。評価二期制導入による影響、市教育委員会の考えや近隣校の動向等、様々なことを考えた。そして、評価二期制導入をきっかけとして、課題解決のためにカリキュラムを改善

しようと考えた。

評価二期制になると4月から9月末までが前期、10月から3月末までが後期になり、それぞれ途中で夏季休業と冬季休業が挟まることになる。それまで、総合的な学習の時間の探究のプロセスは、学期ごとに完結するカリキュラムとなっていた。探究のプロセスを、長期休業をまたぐように計画することにより、学習意欲の維持や計画を立てて学習する習慣の育成につなげることが期待できると考えた。

そこで、まず校長・教頭・教務の企画会議で検討した後、職員会議で「働き方改革のためだけでなく、資質・能力を更に高めるためにも評価二期制を導入したい」と説明した（資料2）。学校運営協議会やPTA総会でも児童の課題解決と働き方改革の必要性を説き、評価二期制導入への理解を求めた。



（資料2）職員会議等での説明資料

③「自ら学ぶ意欲」を育成するカリキュラム改善

年度当初の職員への講話で、前年度の課題を学力調査や学校評価の結果を示して説明し、今年度の重点的に育成を目指す資質・能力や重点取組事項について、それぞれの意見をアンケートで聴取した。その後、グランドデザイン案を提示し検討させた。その結果、重点的に育成をめざす資質・能力として「自ら学ぶ意欲」を中心に据え、学習への興味・関心を高め、目標をもって主体的に学びに取り組む態度の育成を目指していくこととした。

「自ら学ぶ意欲」をよりよく育成していくために、総合的な学習の時間や生活科のカリキュラムの探究のプロセスを、前期・後期で整理し直すように、教務主任と総合的な学習の時間担当に指示した。長期休業中も「情報の収集」「整理・分析」などに児童が取り組み、目標を持って主体的に学びに取り組む態度の育成を図っていくことがねらいである。

第4学年の例では、前期に「探究！学校や地域の魅力！」という単元を設定した。（資料3）個人やグループでふるさとの魅力を考え、取材

先や取材の方法の計画を立て、夏季休業中に情報を集め、整理していった。グループで現地を訪れて、写真を撮影してきたり、電話や手紙のやりとりで取材をしたり、それぞれが考えた方法で材料を集めていった。そして、2学期が始まってから資料をプレゼンテーションにまとめて八代の魅力を発表した。

【4年】総合的な学習の時間 年間活動計画								
年間テーマ	発見！私たちが、ふるさと有佐・八代のいいところ！							
主な大単元	Ⅰ 探究！学校や地域の魅力！ Ⅱ 感動の二分一成人式をプロデュース！ Ⅲ 成長エントリー！							
小単元の目標	(0) 1年間の学習目標として、なりたい自分の姿を具体的に想像する。 (1) 有佐のいいところ＝魅力、ICT機器を活用してショートCMで表現する。 (2) ふるさと有佐や八代の魅力を、取材方法や取材先を工夫しながら、CMを作って発表・発信する。 (3) 二分の一成人式で使う自分の成長や家族への感謝が伝わるプレゼン作品をこれまでの学習を活かして発表する。 (4) 一年間の活動と自分の成長を振り返り、次年度の活動への意欲を持つ。							
月	大単元	小単元	学習活動	時数 (目安)	支援・指導	評価基準		
4	Ⅰ 探究！ 学校や 地域の 魅力！	(0)	○1年後の自分の姿を想像しよう	1	○1年間で身に付けられるスキルや能力を例示する。(先輩の作品の提示など)	学年の学習シート、表		
5			(1)	○小単元(1)の目的・内容を知り、学校の魅力取材する	2	○他学校の作品を示し、ゴールのイメージを持たせる。	自分の姿(観察、ポ	
			○取材した材料を基に、アプリでプレゼンのスライド(CM)を作ろう！	4	○パワーポイントの主な機能を伝え、これを使って自分のイメージを表現させる。	※できる、 内容(観察、ス		
6			(2)	○できたスライド(CM)を発表し合おう。 ※発表と成長エントリー	2	○スムーズな発表のための事前準備。 ○仲間への感想を伝える方法の準備	自分の成 (ワークシ	
				○小単元(2)の目的・内容を知り、有佐や八代の魅力を考えよう！	2	○他学校や先輩の作品を示し、ゴールのイメージを持たせる。 ○前学年の学習や経験を踏まえ、地域の魅力について話し合わせる。	学習内容 シート、表	
7			(3)	○ふるさと有佐や八代の魅力取材する方法を考えよう！ ・取材方法、取材先のアイデアを考えよう。 ・試みの取材しよう(振り返りを通して、取材計画を立てる)。	2	○他学校や先輩の例を示し、参考にさせる。 ○児童の発想を優先するが、実現不可能な事は、試させた上で理由を伝え、再考させる。	自分の調 子(観察、ワ	
				○ふるさと有佐や八代の魅力取材しよう！	6	○取材先の例を示すと共に、身近な地域にも取材できる方がいることを伝える。 ○各々のできる方法で取材を進めさせる(保護者や地域にも依頼する)。	○自分の (観察、ポ	
8			Ⅱ	(3)	○調べたことをCMにまとめよう！	2	○パワーポイントの新たな機能を伝え、これを使って自分のイメージを表現させる。	※できる、 内容(観察、ス
9					○できたスライド(CM)を発表し合おう。 ※発表と成長エントリー	2	○スムーズな発表のための事前準備。 ○仲間への感想を伝える方法の準備	自分の成 (ワークシ
10					○小単元(3)の目的・内容を知り、作品づくりの計画を立てる。	2	○先輩の作品を示し、ゴールのイメージを持たせる。	学習内容 シート、表

(資料3) 前期・後期で見直した年間計画例

全ての学年で夏季休業をまたぐ単元を計画・実施したが、それぞれの計画や取組を振り返って改善していくために、夏季休業中の校内研修で「プチ実践交流会」を行った。担任からは「他学年の計画や取組がとても参考になった」との感想が多く、教師のカリキュラム作成の力量を高めるよい機会となった。前期が終了した時点でも総合的な学習の時間等の成果と課題の振り返りを校内研修で行い、後期の実践の充実を画した。

(2) 授業改善のための校内研修の充実

① 研究テーマ設定に向けて

赴任1年目は「言語能力」と「情報活用能力」をはぐくむために、ICTをどの場面で、どのように活用すれば効果的かを中心に研究を進めた。学力調査や学校評価の結果、「言語能力」と「情報活用能力」については向上が見られたものの、「学習意欲」「学習習慣」「生活習慣」が課

題であることが明らかとなった。

中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」において、「これからの学校においては、子供が『個別最適な学び』を進められるよう、教師が専門職としての知見を活用し、子供の実態に応じて、学習内容の確実な定着を図る観点や、その理解を深め、広げる学習を充実させる観点から、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに、これまで以上に子供の成長やつまづき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。」と述べられているが、日常の授業観察から、教師が一斉に説明・解説する場面がまだ多く、「個別最適な学び」について教師が理解を深め、授業改善に取り組んでいかなければならないと感じていた。

そこで、2年目最初の研究推進委員会で研究主任に校長の思いや考えを語り、校内研修の方向や内容を一緒に検討していった。研究主任は、本校に着任したばかりで、「昨年度の研究の流れや取組を大きく変えずにいきたい」「自分自身が『個別最適な学び』のイメージがよく分からないので、理論研究の期間をとりたい」と、不安げな様子であった。それで、「理論研究について校長や外部講師の講話を計画する、研究授業は学び手の一人として管理職も行う、初めから理論のしっかりした仮説や共通実践事項を作って取り組まなくてもよい」と話して、新しく研究テーマを設定するよう指示した。何度か相談や確認の機会の後、「学ぶ意欲をもち、主体的に学びに向かう児童の育成～ICTの効果的活用と個別最適な学びを通して～」という研究テーマを設定した。

② 「個別最適な学び」の理解を深める取組

まず、校長自身が研修を深め、職員に分かりやすく伝えていくことが大切であると考え、学習指導要領や中央教育審議会答申などを読み込んで理解を深め、セミナーや講演会に積極的に参加したり、教育書を買って求めたり学んだりした。そして、校内研修や職員会議の機会を捉えて、自分なりの学びを職員に復講したり、資料提供したりした。

また、外部講師として、市の教育サポートセンターの指導主事を最初の研究授業に招いて、助言を仰ぐことにした。指導主事には、事前に

連絡を取り、本校のテーマについて説明し、助言してもらいたいポイント等について打ち合わせを行った。当日、指導主事からは研究授業のまとめの後、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実についての講話をしていただいた。

3学期には、熊本県教育委員会の指導主事を招き、「個別最適な学び」について講話をお願いした。次年度の研究の方向を考える材料を得たいと考え、出来上がったばかりの研究論文を事前に送付した。校内研究について助言をいただくとともに、成果や意義を認めていただいたことが、職員の研究意欲の向上につながった。

③研究授業を核とした授業改善の取組

教師は、研究授業を積み重ねることにより授業を改善し、実践的な指導力を高めていくことができる。赴任2年目は、管理職を含め教師全員が大研・小研に取り組み、年間12本の研究授業を行った。研究の仮説と視点は、以下の通りである。

研究の仮説

効果的に ICT を活用しながら、個別最適な学びを意識した学びづくりを行っていけば、児童は学びに向かう力を高め、主体的に学んでいく児童に育つだろう。

視点1 『ICTの効果的活用』

授業や家庭学習の場面で学習効果を上げるために、教師や児童がツール(手段)として適切に用いていくこととする。

視点2 『個別最適な学び』

児童が自己調整をしながら進めたり、自ら課題を設定して解決に向かう学びを深めたりしていく。教師は、児童が学習方法を選択したり、学習する目標や内容を決めたりするための場を、授業や家庭学習の場面で意図的に設定していく。

「個別最適な学び」についての理解を深めるために、前述の通り最初の研究授業時に指導主事を招いた。また、校長も早い段階で自ら研究授業に取り組み、謙虚に学び続ける姿勢を示すようにした。

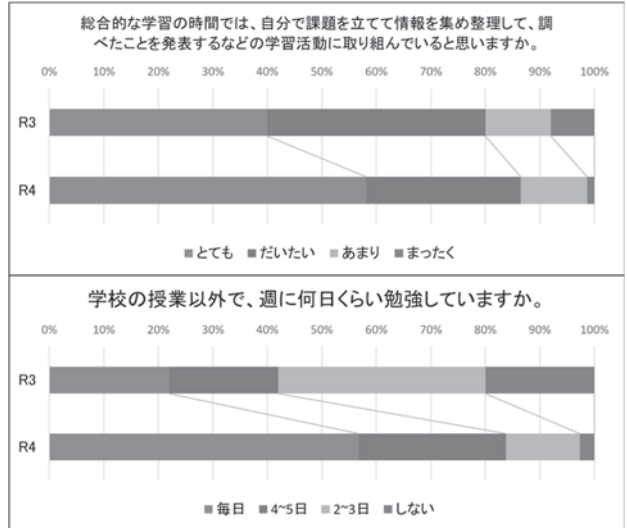
また、それぞれの研究授業の成果と課題をつないでいくことで、研究の深化を目指した。Teams を活用し、研究授業の気付きや振り返りを共同編集していくことで、効率化と同時に成果と課題の共有化も図るようにした。(資料4) これにより、研究授業を重ねるごとに「個別最適な学び」のイメージやポイントについて、教師の理解が深まっていくことを感じた。

視点	研究者	研究の成果
視点1	三浦	「個別最適な学び」を意識した学びづくりを行っていけば、児童は学びに向かう力を高め、主体的に学んでいく児童に育つだろう。
視点2	三浦	児童が自己調整をしながら進めたり、自ら課題を設定して解決に向かう学びを深めたりしていく。教師は、児童が学習方法を選択したり、学習する目標や内容を決めたりするための場を、授業や家庭学習の場面で意図的に設定していく。

(資料4) 研究授業の成果と課題を共有化

5 成果と課題

- 校長の思いや考えを伝え、職員の意見もよく聴きながらカリキュラム・マネジメントを進めたことが、学校総体としてのカリキュラムや授業の改善につながった。
- 学力調査結果では、総合的な学習の時間について、主体的に学ぶ意欲の向上が見られ、家庭学習の習慣化についても改善した。(資料5)



(資料5) 学力調査結果 (R4.12)

- 八代校長会研修会で取組を提案し、質疑応答や情報交換を行って、校長のカリキュラム・マネジメントに関する資質向上に取り組んだ。
- 職員にさらに能動的にカリキュラム改善に関わらせるためにワークショップ等を行いたい。そのための時間の確保を工夫していく必要がある。

6 おわりに

校長のリーダーシップが機能するためには、校長と教頭が一枚岩となることが大切である。また、教務主任や研究主任も重要なポジションである。これらの職員とコミュニケーションを密にして、進捗確認や相談、労いの声かけに心がけてきた。私の学校運営を支えてくれた、これらの職員に心より感謝したい。